

# 曹洞 俳壇

選・村松五灰子

## 分校の子らに巣箱の一つづつ

長崎県 麻生 勝行

評 山間の学校だろうか。生徒らが見守る巣箱から自然を慈しむ心が育つのだろう。無駄がなく、子どもたちや鳥の巣に作者が見つめる優しさのある一句である。

## 春灯しんとろうに三人が寄るそれから

東京都 伊奈 三郎

評 さてメンバーが揃った。何が始まるとも語らない。男とも女とも語らない。背景に春灯という柔らかなさのある季題を置く。読者は想像が膨らむばかり。心憎い手法が見事。

◆ 父母の膝もとのごとはるこた春炬燵

◆ 亡き夫の鞆背負ひて花見かな

◆ 少年に戻れる母校青き踏む

◆ プランターへ線香の灰花まつり

◆ また一つ解き春灯の児となれり

◆ タざくらひそかに吐息もらしをり

◆ 外風呂や木の芽起しの雨の中

◆ 早わらびに胸おどらせて里ぐらし

◆ 独り居の一人会話や鳥帰る

◆ 笹鳴きやダムを見おろす峠茶屋

\*選者吟

## 振り返るとき滝音の変わりけり

五灰子

\*作句小見

俳句は、小さな発見で大景を表現することが出来ます。僅かに心が動いたとき、それらが良い季題と巡りあったとき、「目から鱗」のように一句となるのでしょうか。

# 曹洞歌壇

選・長澤 ちづ

自転車のスタンド直すももどかしく草に倒して友にかけ寄る

奈良県 鈴木 重雄

評 自転車に乗っていた作者が、友人を見つけて駆け寄り草の心逸りが、臨場感をもって伝わってくる。「草に倒して」で草の匂いが立ち上がり感覚的にも印象深い。どんな状況なのかと様々なことを想像させる。

千羽鶴トランペットを荷に入れて子は赴任地の福島へ発つ

福井県 岡田 節子

評 千羽鶴は職場の人から贈られたものだろう。栄転かと思われ、母である作者の幾許かの不安と喜ばしさが窺える。トランペットからは祝福のファンファーレが聞こえてきそう。

◆音たてて火花を散らし除雪車の去りしその朝雪積りたり  
北海道 吉田 洋子  
◆春泥の工事現場のヘルメット甲高き声女性らしきよ  
山形県 多田 さよ

◆ポール使ひ四足歩行を身に課せばノルディックウオーキング獣の気分  
岐阜県 杉山 洋子

◆屈まりて白タンポポに相向かう施設に慣れし三度目の春  
兵庫県 前田あつ子

◆山寺に千の小枝の梅ひらく目白の揺する白きかんざし  
山口県 横川美代子

◆断捨離とふ新しき語の諾えず旧き物への愛着の増す  
静岡県 石野 文子

◆山門をくぐれば左千夫の歌碑の立つ波切不動眼前にあり  
千葉県 富野光太郎

◆大本山僧の素足はきりつとし光る廊下に湯気が浮き立つ  
群馬県 川嶋 尚武

◆温かき笑顔の診察老医師に思わず甘えて敬語忘れる  
秋田県 小松 紀子

◆名も知らぬ数多の人の腕にて支えられる吾と思へり  
熊本県 島田 佳可

## \*選者詠

地震つづく大分に住む方信さんと電話つながらいつとき話す  
ちづ

## \*作歌小見

熊本地震で被災された皆さまにお見舞い申し上げます。元々の日常が早く取り戻せますように。島田さんは熊本県宇城市にお住まい。地震前のご投稿ですがお元気ででしょうか。ご案じ申し上げます、短歌には機会詩としての即時性もあります。



# 大本山永平寺



## 白山拝登

はくさんはいとう

七月梅雨明けのころ、永平寺では毎年恒例の白山拝登がごさいます。

白山に拝登するのは、道元禪師さまの守護神が白山の神である十一面観音（白山妙理大権現）はくさんみょうりだいこんげんで、修行僧たちも白山妙理大権現を守護神としているからです。別当出合べつどうであいという登山口から登り、三時間ほどで室堂むろどうに到着しますが、早い人は一時間半で登ってしまいます。室堂では登山者の安全祈願と遭難者慰霊供養を行い、一泊して早朝、ご来光を仰ぐため頂上を目指します。修行僧全員が参加できるように日にちをずらし、三班に分かれて登るのですが、天候によりご来光を観ることができない班もあります。登るときは晴れていたのに翌朝雨でまったく観られない日もあれば、雨だったのに素晴らしいご来光を観られる日もあり、初めて登る一年目の修行僧が観ることができ、何度も登っている先輩僧が一度も観ることが叶わないこともあります。なかには毎回文句なしの晴天で「一〇〇パーセント観ていますー」という人もおります。

ご来光を仰げないのはちょっと残念に思いますが、白山拝登は大切な行事のひとつであり、めったに山内から出ることのない修行僧たちが心待ちにしている行事なのです。



## 大本山總持寺



### 夏安居解制とお盆

總持寺では四月から始まった夏安居が七月にめでたく解制を迎えます。同時に新到の修行僧たちにとっても禁足（外出禁止）が解かれる嬉しい時節です。

また、七月一日から十一日まで大祖堂でお盆供養の施食会が行われます。特に十日（日）には江川辰三禅師さまが大導師をお勤めになられ、大勢の檀信徒・参詣者で堂内がいっぱいとなります。

施食会が終わりますと、十二日から十五日までは棚経回りです。棚経は、僧侶が各家々を回るお盆の供養です。修行僧にとつて檀信徒の方々と身近に接する良い機会であり、地図を片手にならない街を往来する光景は鶴見の夏の風物詩となっております。

一連のお盆行持の締めくくりは、十七日から十九日の祭りです。大駐車場に櫓が組まれ、「御霊祭り盆踊り大会」と「万灯会」が開催され、多くの来場者で賑わいます。

今年で六十九回目となる總持寺の御霊祭りは、もともと横浜大空襲と鉄道事故の犠牲者を慰霊する目的で始められました。

期間中、仏殿参道や平成救世観音像周辺に無数の灯明が並べられ、東日本大震災や熊本地震などで亡くなられた多くの御霊に對して祈りが捧げられます。